

# 『テアイテトス』第一部 151d7-160d4 の構造<sup>\*</sup>

— 「何ものもそれ自体一であることはない  
(ἐν αὐτὸ καθ' αὐτὸ οὐδέν ἐστιν)」をめぐる考察 —

田坂 さつき

## I

『テアイテトス』第一部(151d7-187a8)の冒頭で、テアイテトスは「知識(ἐπιστήμη)は感覚(αἴσθησις)である。(151e2-3)」と知識を定義する(以後これを「第一定義」と呼ぶ)。するとソクラテスは「第一定義」がプロタゴラスと「同じこと(τὰ αὐτὰ ταῦτα)」を言っているとして(152a1-2)、有名な「人間尺度説」を導入する(152a2-5)。さらにソクラテスはヘラクレイトスらもプロタゴラスと同一歩調をとっているとし(152 d 7-e9)、「万物は移動や運動や相互の変わりから『なる(γίγνεται)』(152d7-8)」という説(以後「運動生成説」と呼ぶ)をも導入する。

本稿の目的は、第一部前半(151d7-160d4)のテキストを分析し、プラトンがどのような意味で「同じ」と言っているのかを明確にし、プラトンが第一定義を提示した直後に二説を導入した意図を考察することにある。論旨を明確にするために結論を簡潔に述べることにする。プラトンは「第一定義」「人間尺度説」「運動生成説」三者とも『それ自体一である(ἐν αὐτὸ καθ' αὐτὸ οὐδέν ἐστιν)』ものを認めないという「秘密の教説」に与するという。

「秘密の教説」は内容上パルメニデスの思想の対極にあり、プラトンは『テアイテトス』第一部において、パルメニデスと対峙する代表的な存在論(運動生成説)と認識論(人間尺度説)において知識論を構成できるかどうかを批判的に検討していると論者は考える。

近年『テアイテトス』研究の権威とされるバーニエットは<sup>(1)</sup>、第一部は帰謬法による「第一定義」の論駁だと解する。バーニエットによれば、まず第一部前半で、「人間尺度説(バ

---

\* 本論文は、学位論文『テアイテトス』研究 — 対象認知における「ことば」と「思いなし」の構造、第一部の論旨を「ギリシャ哲学セミナー」の口頭発表のために要約し再構成したものである。テキストは *Platonis Opera I*, Oxford Classical Text, 1995 を使用した。翻訳は、田中美知太郎訳『テアイテトス』岩波書店、1966年(2001年第36刷)および渡辺邦夫訳『テアイテトス』筑摩書房、2004年を適宜参照した。

<sup>(1)</sup> cf. M. Burnyeat, *The Theaetetus of Plato*, Cambridge, 1990, pp.7-19. esp.7-10; cf. D. Bostock, *Plato's Theaetetus*, 1988, Oxford, pp.48-51; cf. R.M. Polansky, *Philosophy and Knowledge: A Commentary on Plato's Theaetetus*, 1992, Bucknell University Press, pp. 74-75; cf. Bernard Williams ed., *Theaetetus*, Introduction by Bernard Williams, pp.x-xiii; G. Fine, op. cit., pp.105-106. 108. 116-117.; cf. M.M. McCabe, *Plato's Individual*, 1994, Princeton University Press, pp. 133-161. esp. p.133n4, pp. 135-137.

ーニエットは「プロタゴラス説<sup>(2)</sup>」と呼ぶ) とヘラクレイトスに代表される「運動生成説 (バーニエットは「ヘラクレイトス説<sup>(3)</sup>」と呼ぶ)」とが、「第一定義」と論理的に同値であることをプラトンは明らかにする。そして第一部後半(160d5-187a8)で、「ヘラクレイトス説」が不合理な結論を導くことを示し、帰謬法により「第一定義」が成立しないことを示す。<sup>(4)</sup> それゆえ「ヘラクレイトス説」が論駁されると同時に、「プロタゴラス説」も「第一定義」も成立の余地がなくなる以上、伝統的解釈<sup>(5)</sup>のように「二世界論的イデア論」に基づき、「現象界において」プロタゴラス説 および「ヘラクレイトス説」が成立すると解することはできないのである。

しかしテキストから離れて少し考えてみると、「プロタゴラス説」と「ヘラクレイトス説」とが論理的に同値であるという点には、根本的な疑問がある。<sup>(6)</sup> まず第一に、プロタゴラスは世界が各人に相対的に成立していると説く以上、相対化できない世界を一切認めない。それゆえ、「誰かにとって」という限定のない万人共通の世界は、それが流動しているのであれ、静止しているのであれ、プロタゴラスには認められない。これに対して「万物は動く」という思想は、個々人がどのように世界を認識しているかと無関係に、万人共通の流動の世界を説くのである。たとえ、「世界はわたしにとっては常に流動していない。」と相対主義者が主張しても、その人にとっても本当は「万物は常に運動し、生成変化を繰り返している」とするのがヘラクレイトスの「万物は動く(πάντα ῥεῖ)」という思想である。第二に、プロタゴラスが説く「各人に相対化された世界」は必ずしも常に変化している必要はない。「この風は私にとって5分前から今までずっと変わらず冷たい。」という言明は、「万物は動く」という思想には反するが、プロタゴラスの「人間尺度説」には抵触しない。そして第三に、万物が常に運動し生成変化を繰り返し同一性がないとするならば、認識する主体、相対主義に立てば「私にとって」あるいは「あなたにとって」と相対化される「私

<sup>(2)</sup> 「人間尺度説」のみを「プロタゴラス説」とすることはできない点については、本稿Ⅲを参照。

<sup>(3)</sup> バーニエットは「秘密の教説」が万物流転を説く「ヘラクレイトス説」だと単純に解釈する。cf. M. Burnyeat, op. cit., p.7-10,12-19.彼に同調する研究者は多い。cf. R. M. Polansky, op. cit., p.74; cf. G. Fine, "Conflicting Appearances: Theaetetus 153d-154b," *Form and Argument Late Plato*, 1996, Oxford, 105-133, esp.pp.105-106; cf. Bernard Williams, op. cit., p. xi. しかし、テキストでは (cf. 179e3-6,180c7-8)、「秘密の教説」はヘラクレイトス個人の説ではない。バーニエット以前の解釈はこの点に忠実であった。cf. L. Campbell, *The Theaetetus of Plato*, 1973, Arno Press, p36. n3,8., p.39. n3 ; cf. F. M. Cornford, *Plato's Theory of Knowledge*, 1935 pp. 36-39 ; cf. J. McDowell, *Plato Theaetetus*, 1973, Oxford., pp. 121-130., esp. 129-130; cf. D. Bostock, *Plato's Theaetetus*, 1988, Oxford., pp.46-47.

<sup>(4)</sup> バーニエットの解釈によると、第一定義の反証は第一部の中途(183c4)で完了することになる。すると第一部最後の第一定義に対する反証(183d10-187a8)は、論理的には不必要な論証をプラトンは行ったことになってしまう。

<sup>(5)</sup> cf. F. M. Cornford, op. cit., pp.29-60. esp. pp.58-59.

<sup>(6)</sup> ファインはこの点においてバーニエット解釈を批判しているが、その解説策として、第一部全体から相対主義的な色彩を薄めようとしている。その結果、「人間尺度説」の導入部において非感覚的な判断も含まれていることに目をつむり、第一部後半でさらに明確になるプラトンの相対主義批判の重要性を見落としている。cf. G. Fine, op. cit., pp.106-107, 111-122.

や「あなた」の同一性が確保できなくなる。相対主義をとる場合、各人に相対化された世界は変化していても構わないが、認識が成立する認識主体の同一性は確保しなければならない。以上の点で両説の同一性には疑問があるが、事の成否を決定するのはテキストである。テキストを根拠に考察を進めることにする。

## II

テアイテトスは、ソクラテスに促され(151d3-e1)、「知識は感覚である(第一定義)。」という知識の定義を提示し(151e1-3)、次のように説明する。「何かを知っている人は、知っている当のものを感覚している(151e1-2)。」と。

テアイテトスが第一定義を提示すると、ソクラテスはそれが「知識に関する容易ならぬ説(λόγον οὐ φαῦλον)」であり(151e8-152a1)、プロタゴラスもまた「別の仕方で、それら同じこと(τὰ αὐτὰ ταῦτα)を語っている(152a1-2)」と言って<sup>(7)</sup>、人間尺度説を導入する。そしてソクラテスはプロタゴラスの書物からの引用(M)とその解釈(M')とを示す。

M 万物の尺度は人間である、「ある」ことについては「ある(ἔστι)」ということの(尺度は人間であり)、「あらぬ」ことについては「あらぬ」ということ(尺度は人間である)(152a2-5)。

M' それぞれのものが「私に現われる(ἐμοὶ φαίνεται)」ような仕方、それぞれのものは「私にとってある(ἔστιν ἐμοί)」。またあなたに現われるような仕方、「あなたにとってある」。そして人間とは、「あなた」と「私」である(152a6-9)。

M' は、「誰かに現われる」という「現われ」を記述する部分と「誰かにあってある」という「存在」を記述する部分とが等値で結ばれている。つまり「現われ」と「存在」とが一対一対応している。換言すれば、相対的な存在に符合する仕方、相対的な認識が成立する、と説くのである。それゆえM' は、「現われ」から独立に「ある」と語りえるような世界が客観的に成立している、とする立場を退けなければならない。ソクラテスは、具体例をあげる。同じ風が吹いている場合、われわれのある人は寒く、ある人は寒くない。またある人は少し寒く、ある人はひどく寒いということがある(152b2-5)。いわゆる「相反する現われ」の事例である。この事例では、風そのものの存在については問わずに、風のあり方(可感的性質)のみを問題にしている。これについて、ソクラテスは対立する二つの世界観(X,Y)を示す。

<sup>(7)</sup> 単純に「感覚は知識である。」というテーゼが「人間尺度説」と同義だとすることはできない。知識の源泉は感覚経験であるとする哲学者がみな相対主義的な認識論をとっていたとは言えない。独我論を説く場合にも、また相対主義を否定して、ある公共的な了解が成り立つ世界を認める場合にも、「知識は感覚である。」と主張することは可能である。

X 「風それ自体(*αὐτὸ ἐφ' ἑαυτοῦ τὸ πνεῦμα*)」が冷たい、あるいは冷たくない(152b2-3)。

Y (風は) 寒い人には冷たく、寒くない人には冷たくない(152b3-4)。

ソクラテスとテアイテトスは、知者プロタゴラスに従い(152b1-2, b7-8)、Yに立って議論をすすめる。Yは風の冷たさは各人に相対的にのみ「ある」という。すなわち、風の冷たさは感じるひとによって異なったあり方をしている以上、必ず「各人にとって」という限定句をつけて相対化しなければならない。それゆえYは「各人にとってF(ただしFは述語)である」と一般化することができる。

これに対してXは、各人への現われとは独立に客観的な事実が成立しているとする立場である。各人にどのように現われていようが、それとは独立に「風それ自体が冷たい」というありかたを認める。この場合には、各人への現われが事物のありかたをそのまま映しているのではないので、各人がその「冷たさ」を感知できないこと、つまり誤って風の性質を判断することもありうることになる。

プラトンはここではXとYの成否には言及せず、論理的な関係のみを問題にする。つまり、「人間尺度説」に立つならば、「それ自体Fである」というあり方を否定して、「各人にとってFである」というあり方を認めなければならない、という論理的な関係を示しているのである。

ソクラテスは「人間尺度説」を導入した後、「人間尺度説」から「第一定義」が導出できることを、次のような仕方で論証する(152b10-c7)。まず、人間尺度説M'において、現われが「各人に」であることを確認し(152b10-11)、そして「現われること」は「感覚すること」である点について、テアイテトスの同意を求める(152b12-13)。五感で感覚可能な諸性質が「誰かに現われている」という事態は、「誰かが可感的性質を感覚している」と記述することができる。人間尺度説M'では事物は感覚者に相対的にのみ記述可能である以上、「現われること」は「誰かに現われること」以外ではない。つまり、各人の感覚から独立に「風それ自体(*αὐτὸ ἐφ' ἑαυτοῦ τὸ πνεῦμα*)」が冷たいか冷たくないかを語ることもそのものを否定しているのである。したがって、「それ自体Fである」というあり方を否定するという前提の下ではじめて、「各人に現われる」という表現は「各人が感覚する」という表現に変換可能となり、「各人が感覚している通りに、各人にとってそのようである(152c2-3)」、と言えるのである。冷たい、暑い等感覚性質に関する判断(152c1-2)が相対的にのみ記述可能であることを前提すれば、感覚している内容は真であり、誤りなきことになる(152c5-6)。他方「知識」とは、事物のありかたを正確に語るものであり、その内容は真であり誤りが無い。そして、ここから「知識は感覚である。」という第一定義を導くことができるのである(152c5-6)。

ここで重要なことは、「人間尺度説」もそれから導出される「第一定義」も、各人への現われとは独立に客観的な事実が成立していること(X)を認めず、「それ自体Fである」というもののあり方そのものを否定すること(Y)を前提にしている、という点である。

## III

次に、ソクラテスはテアイテトスに「秘密の教説」と呼ばれる「実に容易ならぬ説(152d2)」に言及する。プロタゴラスはこのことを「われわれ大衆には謎めいた仕方でも話し（人間尺度説）、他方で弟子達には真理を秘密裏に語った(152c8-11)。」という。テキストでは、「秘密の教説」は二つの部分（1）、（2）に分かれ<sup>(8)</sup>、形式的に整った構成になっている。

(1) ①『何もものもそれ自体一であることはない(ἐν μὲν αὐτὸ καθ' αὐτὸ οὐδέν ἐστιν, 152d2-3)。 — 以後これを『それ自体一である』否定説』と略記する。

②あなたは、何であるとも、どのようであるとも、正確に「対象を規定する(προσείποις)」ことができない。もし、あなたが「大きい」と「述定する(προσαγορεύης)」ならば、「小さい」とも現われ、もし「重い」と述定するならば、「軽い」とも(現われる)。あらゆるものは同様である。何もものも一であることも、何かであることも、どのようかであることもないのだから(152d3-6)。

(2) ①すべてのものは、移動や運動や相互の交わり「から(ἐκ)なる(γίγνεται)」(152d7-8)。

②それらすべてのものをわれわれは「ある(εἶναι)」と言っているけれども、われわれは正しく述定していない。なぜなら、何ものいかなる時においても「ある」のではなく、常に「なる」のだから(152d8-e1)。

(1) の「それ自体」という表現を「各人にとって」という限定句によって相対化することを拒む表現と解すれば<sup>(9)</sup>、『それ自体一である』否定説』は、明らかにⅡで提示された X と対立する。なぜなら、X とは「それ自体 F である」という記述を認める立場（風それ自体が冷たい、152b6-7）であるが、(1) の『それ自体一である』否定説』はそれを認めないからである。それゆえ (1) ①の「一(である)」という表現を単なる強調とすると、プロタゴラスが弟子達に秘密で教えた『それ自体一である』否定説』は、あらゆるものが「各人にとって F である」というあり方をするという立場（Ⅱで提示された Y）と同義になる。

<sup>(8)</sup> 「秘密の教説」が二つの部分に分かれていることは以前から指摘されていた。cf. F.M.Cornford, op. cit., pp.38-39. しかしバーニエットの解釈以降、両者を区別せずに論じるようになってしまった。cf. D. Bostock, op. cit. pp.48-51; R. M. Polansky, op. cit., pp. 74-75.; Bernard Williams, op. cit., pp. x-xii.

<sup>(9)</sup> どちらも、限定ぬきに「ある」ということ意味しているという点では共通であるが、正確に言えば、ギリシャ語の表現は異なっている。相対主義の文脈では‘αὐτὸ ἐφ' ἑαυτοῦ’が使われ、この直後に登場する「感覚論(156a2-157c3)」において感覚器官との相関関係で感覚対象の性質規定が決まるという文脈では‘αὐτὸ καθ' αὐτό’が用いられている。プラトンは、認識主体に相対化されるという立場と感覚器官のその時々との状態との相関関係で性質規定が決まるという立場との違いを表現上区別している。この点については拙論「知識は感覚である」という定義をめぐって—プラトン『テアイテトス』157d7-160d4 の一解釈— 湘南工科大学紀要第35号第1号 pp.115-135. esp.126-133.を参照されたい。

しかし『それ自体一である』否定説は、「人間尺度説 (M')」には明記されている「各人にとって」という限定句を欠いている。これまでの議論展開を全く無視して「秘密の教説」だけを読むと、(1)で『それ自体一である』否定説を主張する理由を、(2)の「運動生成説」が与えていると解することもできる。すると『それ自体一である』否定説は全く別様の解釈になる。すなわち、あらゆるものが、運動によって「なる」のであるから、「一でありつづける」というものは何一つない、と解するのである。この場合には、「一(である)」という表現は「一つの状態にとどまる」という意味を持ち、「それ自体」という表現は、相対主義との対比ではなく、単なる強調で付加されたものと読める。

このように『それ自体一である』否定説は、直前の「人間尺度説」との関連で解釈することも、直後の「運動生成説」との関係だけで解釈することも可能である。<sup>(10)</sup> この二義性について、(1)と(2)の構造を通して、さらに考察してみよう。

まず、(1)はすべて否定命題で構成されている。(1)①は、「何ものもそれ自体一であることはない」といういわば存在についての原理命題である。(1)②は、(1)①に対応するわれわれの言語表現(述定)を、われわれが経験する「相反する現われ」を通して、原理命題①に関連づけて説明する。これに対して(2)はすべて否定命題ではなく、肯定命題である。(2)①は、(1)①と同様に原理命題であるが、否定的な内容ではなく、万物がさまざまな運動から「なる」という世界のあり方について具体的な内容を含んでいる。そして(2)②は、(1)②と同様、①に対応するわれわれの言語表現(述定)を原理命題(「運動生成説」と関連づけて説明する。

次に、それぞれの原理命題①を比較する。事柄自体として、(1)①と(2)①は同義ではない。(1)①は否定命題であり、肯定的な主張は含んでいない。「それ自体一である」という規定を認めない人であれば、その肯定的な主張内容が何であれ同意するテーゼである。例えばヘラクレイトスであれば、万物流転の世界観に基づいて(1)①を主張するであろうが、プロタゴラスであれば、「人間尺度説」に基づいて(1)①を主張するだろう。また別の立場から(1)①を主張することも可能である。つまり、『それ自体一である』否定説には複数の解釈が可能であり、(2)①は『それ自体一である』否定説の唯一の解釈ではないのである。

(1)②についても、相対化を示す限定句がないので、同様に二義的に解釈できる。(1)②は、相対的な仕方ではか事物を規定できないという理由で主張することもできるが、(2)②のように万物が絶えざる生成変化を繰り返すという理由で主張することもできる。何かそれ以外の理由で主張することも可能である。また、相反する現われについても同様に、「わたしにとって重い」ものが「あなたにとって軽い」というように相対主義的に理解することも、「重かったものが軽くなる」というように異なった時点での重さの変化として理

<sup>(10)</sup> プラトンは、『それ自体一である』否定説と「運動生成説」とを、付加された事柄(「運動生成説」)を以前の文脈と対比させて強調することを鮮明にする順接の接続詞( $\delta\epsilon\delta\eta$ )で結んでいる。cf. J. D. Denniston, *The Greek Particles*, 1954(2<sup>nd</sup> 1981), Oxford p.460.

解することもできる。

このように、(1) ①の『それ自体一である』否定説は否定命題であるゆえに、複数の解釈が可能である。それゆえ、「運動生成説」は『それ自体一である』否定説の一つの解釈ではあるが、唯一の解釈ではない。<sup>(11)</sup> したがって両者は、同義とはいえないのである。

実際、『それ自体一である』否定説は、第一部に登場する諸説を関係付ける要所に必ず登場する。<sup>(12)</sup> プラトンにとって『それ自体一である』否定説は諸説を導入する意図と密接に関係していることはまず間違いない。しかし残念なことに、今までの解釈はこの重要な点を見落とし、『それ自体一である』否定説をプロタゴラスの説あるいはヘラクレイトスの説の一表現形態だと誤解し、当該箇所について首尾一貫した説明を提示できなかったのである。

マクダウエルは、プロタゴラスの秘密の教説を導入した経緯を重視して、『それ自体一である』否定説を「人間尺度説」の結論として解する。<sup>(13)</sup> すなわち、「誰かにとって F である。」と語るべきであるがゆえに、端的に「F である」と語ることはできないと解し、『それ自体一である』否定説を「運動生成説」から区別する。しかしこのように解すると、『それ自体一である』否定説と「運動生成説」との関係づけが難しくなる。これに対してバーニエットは、『それ自体一である』否定説と「運動生成説」とを同一視して解釈する。<sup>(14)</sup> つまり、万物は運動するがゆえに静止していないということと同義に『それ自体一である』否定説を解するのである。しかしこのように解すると、「人間尺度説」とのつながりは跡絶え、プロタゴラスが弟子に教えるという経緯の説明はつかない。プラトンは、プロタゴラスもヘラクレイトスも他の知者も支持している説として提示している以上、『それ自体一である』否定説は両者の説を包含するような説と解さなければならぬはずである。

バーニエットは、『それ自体一である』否定説には複数の解釈が可能であるにもかかわらず、「運動生成説」と同義だと一義的に解釈したために、「第一定義」「プロタゴラス説」「ヘラクレイトス説」三者が互いに必要十分条件を満たすという意味で同一だとする無理な解釈をとらざるをえなくなったのである。それゆえ、「人間尺度説」が『それ自体一である』否定説に与することを示す文脈をも、「人間尺度説」と「運動生成説」との同一性を示す文脈と誤解したのである。

しかし何故プラトンが、「人間尺度説」と「運動生成説」とを「秘密の教説」として一つに扱ったのであろうか。プラトンは、はじめに「秘密の教説」をプロタゴラスの「秘密の教説」として導入するが(152c8-11)、すぐさま、ヘラクレイトス、プロタゴラスのみなら

<sup>(11)</sup> この点については、マクダウエルも異なった立場からではあるが認めている。cf. J. McDowell, *op. cit.*, pp. 121-130.

<sup>(12)</sup> 『テアイテトス』 152b6-8, 152d2-3, 157a8-b1, 160b8-c1, 182b3-4.

<sup>(13)</sup> Cf. McDowell, *op. cit.*, pp.121-122.

<sup>(14)</sup> Cf. Burnyeat, *op. cit.*, pp.12-13

ず、エンペドクレス、エピカルモス、ホメロスら、パルメニデスを除くすべての知者が同調している説と位置づけている(152e1-10)。プラトンがここで、パルメニデス対反パルメニデス論者という構図を念頭においていることは重要である。プラトンがここで強く意識しているのはパルメニデスである。なぜなら、「秘密の教説」を構成する二つの説(1)『それ自体一である』否定説と(2)「運動生成説」の否定(1') (2')は、それぞれはパルメニデスの立場を端的に示しているからである<sup>(15)</sup>。

(1') それ自体一であるものがある。

(2') 運動も生成もない。

つまり「秘密の教説」は、パルメニデスの思想に反対する、という一点において立場を同じくする人々の包括的なテーゼなのである。ここでプラトンは「秘密の教説」をヘラクレイトス一人の説ではなく、複数の知者が標榜する反パルメニデス説として導入しているが、第一部後半でも、反パルメニデス派とパルメニデス派の対立をすもうに例えている(cf. 180c7-181b5)。第一部で、プラトンが両派の対立構図を念頭において議論していることは明らかである。

したがって、「第一定義」「人間尺度説」とが「同じこと」を言っている(152a1-2)、あるいはプロタゴラスやヘラクレイトスに代表されるパルメニデス以外の知者が同一步調をとっている(152e1-6)、と捉えるプラトンの視点は、上述のような思想的な対立構図の上にある。プラトンは、「第一定義」「人間尺度説」「運動生成説」が、パルメニデスと対立する『それ自体一である』否定説に与するという一点で同じだと捉えているのである。

#### IV

次にソクラテスは「感覚論」を展開し、「運動生成説」を原理として相関関係により対象の可感的性質が決まる世界を素描し、それが「秘密の教説」を支持する知者たちの真意を明かすことになる、と言う(155d9-e2)。感覚論の構造は次のようになっている。感覚論は「運動生成説」を原理として、知覚を成り立たせる構成要素すべてが絶えざる運動を繰り返すことにより、可感的性質が個々の感覚対象と個々の感覚器官との間に固有の仕方で生じることをモデル化したものである(156a2-157c6)。可感的性質は、特定の感覚対象と特定の感覚器官とが遭遇する時にのみ瞬間的に生じ、その性質は感覚対象と感覚器官との組み合わせによって異なる。それゆえ、感覚論によれば、生成変化のプロセスの中で、可感的性質が感覚器官に固有の仕方で瞬間的に生じ、感覚器官はそれをその瞬間感覚していることになる。その際、プラトンは再三、絶えざる生成変化のみならず、相関関係によって

<sup>(15)</sup> Cf. Diels-Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 1934-54, Berlin, Ch.28, B8.

知覚が成立していることを強調し、これをプロタゴラスが受け入れるかのように議論を進める。ここには、感覚の場面でプロタゴラスと「運動生成説」との接点を作ろうとするプラトンの意図が読み取れる。

プラトンは第一部冒頭で、「知識は感覚である」という第一定義がプロタゴラスの「人間尺度説」から導出されることを示し、両者が『各人にとってFである』世界観に立つことを示した。しかし『各人にとってFである』世界観には、これを基礎づける存在論が必要である。つまり、各人に相対化された仕方では事物が実際に存在し、それと符合する認識が成立していることを説明しなければ、「人間尺度説」には存在論的な基盤がないことになる。感覚経験についていえば、事物の可感的性質はすべて感覚者に対してのみ決定し、決定した通りに感覚できるのは各感覚者のみである、ということが存在論的に基礎付けられないと、各人の感覚は知識であるとは言えないのである。

しかしながら、「人間尺度説」を信奉するプロタゴラスは、自分に相対化された世界については語れても、万人の世界について語れない。相対主義的な認識論は、たとえ自説の正当化のためであっても、万人の感覚の成り立ちについて一般的な仕方では語ることができない、これは「人間尺度説」の自己反駁につながる哲学的に重要な論点である。プラトンが、「『それ自体一である』否定説」と「運動生成説」をプロタゴラスが弟子達に密かに語った「秘密の教説」と言うのは、深い意味がある。つまりプロタゴラスは、万人の世界の有り様について、「プロタゴラスにとって」という視点を外して語ると「人間尺度説」と明らかに矛盾してしまうので、万人にとって世界がどうあるかについては公に語れないのである。だから万人の世界の有り様については、密かに弟子達にのみ語ったのである。

しかしながら、先に確認したとおり、「人間尺度説」と「運動生成説」とは互いに独立であり、反パルメニデスという一点でプラトンによって意図的に結び付けられている。「人間尺度説」には存在論的な基礎付けが必要であるが、それを「運動生成説」が行う必然性は全くない。ところがプラトンは「人間尺度説」を敢えて「運動生成説」によって存在論的に基礎付けようとする。

「感覚論」によれば、可感的性質は感覚器官と感覚対象との相関関係により決定する。そこでプラトンは、相関関係という局面から『それ自体一である』否定説を解釈し<sup>(16)</sup>、「運動生成説」に従ってわれわれの言語から「ある (εἶναι)」を排除して「なる」の使用を説く際に、「なる」に「何か (誰か) にとって (τινι)」という限定句を加える。「何かにとって」という限定句は相対化 (各人にとって) と相関関係 (特定の感覚器官に対して) との両義を併せ持つ二義性がある。この二義性を用いて、「感覚論」の相関関係と「人間尺度説」の相対化とを橋渡しするのである。しかし「感覚論」が体現する世界像は、一見相

<sup>(16)</sup> ここでは『それ自体一である』否定説に含まれる「一 (ἓν)」が抜け落ちている。その理由は、この箇所では相関関係ゆえに『それ自体 (αὐτὸ καθ' αὐτό)』ある」という在り方を特に否定しており、生成変化するゆえに「一であるとは言えない」という点には強調点がないからである。

対的なもののありかたを説明するように見えるが、実際には「人間尺度説」とぴったり符号しない。

まず第一に、「運動生成説」はものを立ち止まらせる「ある (*εἶναι*)」の使用を一切禁じている (157b1-c2)。それは絶えざる変化を繰り返す、相関関係によって規定が絶えず変化するものは「なる」としか語れないからである<sup>(17)</sup>。「風が私にとって冷たい。」という記述も、ある時点の風のありかたを言葉により立ち止まらせて語っている。それゆえ「感覚論」が「ある」の禁止を明言した後も、「人間尺度説」は最後まで「各人にとって『Fである』』という記述を排除できない (158a2, 5-7, d4, e5-6, 159d3-6, 160b5-c2. etc.) これは、相対化すれば世界について「ある」の使用を認める「人間尺度説」と、一切の「ある」を排除する「感覚論」との乖離とを如実に示している。第二に、「人間尺度説」において、事物の可感的性質が相対化されるのは、認識主体としての「私」や「あなた」に対してであって、「感覚論」でいう「見ている目」に対してではない。つまり、「人間尺度説」では認識主体が尺度であり、各感覚器官は尺度ではない。これは哲学的に重要な点であり、後にプラトンは、感覚器官ではなく魂が感覚主体であることを強調する<sup>(18)</sup>。第三に、「人間尺度説」を説くプロタゴラスは、そもそも、万人の感覚経験の成り立ちを一般的な仕方では説明することはできない。プロタゴラスができるのは「プロタゴラスにとって」感覚経験はどのように成り立っているかを示すかを示すことのみである。つまり、プロタゴラスは、「プロタゴラスにとって」世界がどんな在り方をしているかは語れるが、万人の世界について一切語れない。「人間尺度説」が真であれば、プロタゴラスのみならず、だれもが万人の世界について語れないはずである。「感覚論」が説明する世界が相対的な世界と一致すると言う人は、それは各人に成立する認識を鳥瞰的にみる、ある意味で絶対的な視点に立っている。そのような絶対的な視点に立てる人がいない、というのが「人間尺度説」の主張なのである。

それゆえ、「人間尺度説」の内実を實在論的に語ろうとするとき、「人間尺度説」と「運動生成説」両者を包括しなければならないため、「ある」と「なる」を併記し、相対的な限定を相関関係を併記せざるを得ない。諸説の関係を締めくくる以下の箇所では、これが顕著になる。

すると結局残るところは、僕 (ソクラテス) とそのものとお互いにとって「ある」なら「ある」、「なる」なら「なる」ということになるのだと思う。なぜなら、僕の「ありよう (*οὐσία*)」とそのもの「ありよう」とは必然によって結び合わされているのであって、僕とそのもの以外のなにものにも結び合わされてはいないのだし、またそうか

<sup>(17)</sup> これは、後半部で展開される反駁の重要な論点である。『テアイテトス』183a10-c3を参照。

<sup>(18)</sup> バーニエットはこの問題を第一部最終議論 (184b3-187a8) で取り上げている。彼は、認識主体の同一性をヘラクレイトス説が確保できないこと、そして感覚器官が感覚主体たりえないことを指摘している。Cf. Burnyeat, "Plato on the Grammar of Perceiving", *Classical Quarterly* N. S. 26, 1976, pp. 29-51

とって、僕の「ありよう」は僕自身にだけ、そのものの「ありよう」はそのもの自体にだけ結び合わされているのでもないからだ。つまり、残るところは僕とそのものとの「ありよう」がお互いに結び合わされているという場合だけになる。したがって、もし誰かが何か「ある」という言葉を用いる場合には、その人はそれを「何か（誰か）にとってある」とか、「何か（誰か）のである」とかあるいはまた「何か（誰か）との関係においてある」とか言わなければならない。そしてこのことは「なる」という言葉の場合も同様である。これに反して、「何かそれ自体でそれ自体にとどまったまま『Fである』とか『なる』とかというものは、この場合自ら口にしてはならないばかりではなく、また他の者が言っているでもこれを許容してはならないというのが、われわれが論じてきた議論の示すところである（160b5-c2）。

プラトンは第一部前半で、パルメニデスに対峙して「それ自体一である」という規定を満たすものを想定せずに、世界についても認識についても語れるとする立場を一括しようとした。「感覚論」は「『それ自体一である』否定説」を原理として、運動生成する世界と相対主義的な認識論とを一つに纏める試みである。しかし「運動生成説」と「人間尺度説」とは根本的に性格を異にする哲学の説であるため、上記引用箇所のような両論併記という形以上に距離は縮められない。そもそもプラトンにパルメニデスに対峙する立場を一括するという意図がなければ、両説は結び付けられることはなかったのである。バーニエツト以降多くの研究者はこの距離に気づかず、「感覚論」の原理である「運動生成説」は「人間尺度説」と一致する、と単純に考えてしまったのである<sup>(19)</sup>

## V

以上の議論にしたがって、第一部前半に登場する諸説を関係づけると次のようになる。「運動生成説」、「人間尺度説」および「第一定義」は「『それ自体一である』否定説」を支持するという点において同じ立場に立つ。このことをプラトンは、第一部前半の最後に次のような仕方でまとめている。

ホメロス、ヘラクレイトスなどのああした一族のものが全体となって唱えている「あたかも流れるもののごとく万物は動いているのだ」というもの、またこの上ない知者のプロタゴラスが主張する「すべてのものの尺度であるのは人間だ」ということも、これらが正しいとすると、「感覚は知識だということになる」という断定も、畢竟は「同じこと」に帰着してしまうのだ（160d5-e2）。

<sup>(19)</sup> ファインはこれに疑問をなげかけた。cf. G. Fine, *op. cit.*, pp. 105-106. ただし論者は、ファインの解決法には反対である。この点については註6を参照されたい。

議論構成をたどれば、「運動生成説」と「人間尺度説」および「第一定義」は、『『それ自体一である』否定説』に帰着する。それゆえこの「同じこと」は、『『それ自体一である』否定説』を指している。このことはIVで挙げた箇所(160b5-c2)で『『それ自体一である』否定説の内実が確認され、「これがわれわれの議論が論じてきた議論が示すところだ」と明記されていることを受けている。このことは第一部前半の議論構成から考えても、諸説の主張内容の論理的関係からも明らかである。

ソクラテスが第一定義を直接検討することを避け、「人間尺度説」と「運動生成説」とを導入したのは、パルメニデスと対立する立場として第一定義を捉え、同じ立場に立つ「人間尺度説」と「運動生成説」とを合わせて検討する意図があったからである。「第一定義」は「人間尺度説」から導かれ、「人間尺度説」と「運動生成説」は、パルメニデスに対峙して「それ自体一である」ものを認めないという立場に立つ。それゆえプラトンは『『それ自体一である』否定説』に与するという点において反パルメニデスという立場を一括し、「第一定義」「人間尺度説」「運動生成説」三者がその点で立場を同じくすることを論証する。<sup>(20)</sup> プラトンは第一部前半の議論を通して、「それ自体一である」という言葉の使用を否定する相対主義や万物流転の思想を根拠に「感覚が知識である」と主張する可能性を示し、第一部後半でそれらを反駁する手法をとった。

しかし、これまでの考察が示すとおり、『『それ自体一である』否定説』において諸説を一括する試みそれ自体には困難があった。特に「感覚論」を媒介にして「運動生成説」を

<sup>(20)</sup> 本稿では紙面の制約上、第一部前半(151d7-160d4)の議論全体を詳述することができなかつた。以下第一部前半の議論構成のみを示すことにとどめる。

- ① 「第一定義」(151d7-e7)
- ② 「人間尺度説」(151e8-152a5)
- ③ 「人間尺度説」⇒「第一定義」(152a6-152c7)
- ④ 「人間尺度説」⇒『『それ自体一である』否定説』⇒「運動生成説」(152c8-e10)  
「人間尺度説」: 『『それ自体一である』否定説-相対主義解釈』152b1-9, cf.152a8-d7  
「それ自体一である」の禁止理由: 「誰かにとってしかじかである」  
「運動生成説」: 『『それ自体一である』否定説-運動生成解釈』152d2-e10  
「それ自体一である」の禁止理由: 運動や生成や相互関係によって「なる」
- ⑤ 「運動生成説」(153a1-d7)  
事例1: 当の事物に性質変化がないにもかかわらず、相関関係の変化によって性質規定が異なる事例(背丈・サイコロ) (153d8-155e2)
- ⑦ 「感覚論」事例 色(「運動生成説」+相関関係による可感的性質規定)  
⇒『『それ自体一である』否定説-運動生成および相関関係規定解釈』(155e2-157d12)
- ⑧ 事例2: 同一人物の状態の相違により判断が異なる事例(狂気・夢) (157e1-158e4)
- ⑨ 「修正感覚論」事例 健康と病気(「運動生成説」+相対化による可感的性質規定)  
⇒『『それ自体一である』否定説-運動生成および相対主義解釈』  
⇒「人間尺度説」⇒「第一定義」(158e5-160d4)
- ⑩ 「人間尺度説」⇒『『それ自体一である』否定説』  
「運動生成説」⇒『『それ自体一である』否定説』  
「運動生成説」・「人間尺度説」⇒『『それ自体一である』否定説』(160d5-e5)

「人間尺度説」と架橋するために、プロタゴラスには論理的な必然性がないにもかかわらず「運動生成説」を認めさせなければならなかった。プラトンがいわば強引に諸説を一括しようとしたのは、「それ自体一である」ものを立論することなしに存在論と認識論が一貫性をもって構築できるのかどうかについて、強い関心があったことからである。

それではプラトン自身は、『『それ自体一である』否定説』に対してどのような立場に立っているのだろうか。第一部後半でソクラテスは、ヘラクレイトス派とパルメニデスとの中間に来てしまったと言う(180e5-181a1)。つまりプラトンは、『『それ自体一である』否定説』には与しないが、パルメニデスとも距離をおいている。中期イデア論は、いわば万物流動の世界観と永遠不動の二者との緊張関係のなかで構築されたという見方は哲学史の解釈として定着している。他方、プラトンの中期では、「それ自体一であるもの(*αὐτὸ καθ' αὐτὸ ἐν ὄν*)」という表現はイデアを意味する、いわゆるテクニカルタームであり<sup>(21)</sup>、イデアを立てる一方で、事物の運動生成をも認める立場をとっている。中期から後期の間に位置するとされる『テアイテトス』には、この表現を用いてイデアに言及する箇所はない。しかしプラトンがこの表現を『テアイテトス』で無頓着に使用することはまず考えられない。しかも、「人間尺度説」を正当化する一つの根拠となる「相反する現われ」は、中期ではプラトンがイデア論を立てる際に重要な役割を果たしており、それは、現象界との対比という点よりもむしろ、相反する述語づけの場面が問題になっている。<sup>(22)</sup>

『『それ自体一である』否定説』は、「それ自体で一である」という規定を満たす対象は存在せず、あらゆる事物は相反する述語づけが可能である、という立場であり、「運動生成説」は「それ自体で一であるもの」を想定せずに世界について語れるという立場である。つまり、それがイデアであれ何であれ、「それ自体で一であるもの」という規定を満たす対象を想定することが問題であり、「人間尺度説」と「運動生成説」はそれに反対する立場なのである。確かに、イデアを立てる際の問題点は、中期の『パルメニデス』ですでに指摘されている。しかしそれは無限後退等、いわゆる形式的な難点であった。『『それ自体一である』否定説』に立つ論者達は、形式的な問題を議論する以前に、そもそも「それ自体で一であるもの」という規定を満たすものを立論しなくても、世界のあり方を正確に語ることができ、知識が成立する、と主張する。プラトンは『テアイテトス』ではこの主張と真っ向から対峙している。

『テアイテトス』は知識を論じながらも、イデア論について明示的な言及はない。しかしこのことは、プラトンがイデアを立論する必要がなくなったことを意味しない。第一部でプラトンが、「それ自体一である」ものを立論することなしに知識について語る諸説を一括し、後半で反駁することを考えると、イデア論への言及がないゆえにイデア論を破棄し

(21) 『パイドン』 65e6-66a8, 『クラテュロス』 386c2-386e4 を参照。

(22) ‘中畑正志「相反する現われ-イデア論生成への一視点-」『プラトンの研究』、1993年、九州大学出版会、81-100頁’を参照。

たとするのは早計である。しかしだからといって、『パルメニデス』において難点が指摘された以上、『テアイテトス』でも中期と同様なアイデア論がそのまま保持されているとするのも早計である。アイデア論への言及の有無から、保持か破棄かを論じるのは、あまりに表面的であり、そして、この問いを立てること自体が早計である。『国家』以降、プラトンがアイデア論をなお正当化する道を探っていると解する場合にも、アイデア論を再考し新たな論を立てようとしていると解する場合にも、プラトンが『テアイテトス』で「『それ自体一である』否定説」を検討することは、ごく自然な成り行きだと論者は考える。『テアイテトス』第一部は、中期以降のプラトン思想の動向を探る上で重要である。

## 後記

本稿は2005年9月11・12日に東洋大学で開催された「第9回ギリシャ哲学セミナー」での口頭発表の原稿に加筆修正したものである。発表後の討論においては、多くの方々から貴重なご意見ならびにご教示をいただき、心から感謝している。当日いただいた質問は二つの論点に集約される。第一に、日本では支持者が多いバーニエットのB解釈批判が正当かどうか、そして第二にプラトンの思想史上この解釈が適切かどうかである。ここで以上二点をめぐる討論を振り返り、その後の考察も含めて補足させていただきたい。

\*

まず第一の論点、バーニエットのB解釈批判に関しては、特に本稿冒頭で三点指摘したヘラクレイトス説とプロタゴラス説との相違点には異論があった。これについては発表原稿に説明不足の感があったので加筆修正を加えている。この三点は、第一部後半の両説を検討する際に重要になる点でもあり、後に詳しく論じたい。また、ヘラクレイトスの世界は相対主義を体現しているのではないか、というご指摘については譲れない点が多く、第一部前半のテキストにおける根拠をお示しした。これは口頭発表では割愛した議論とも関係があるため、本稿の註20に第一部全体の議論構成を加えた。そこには「運動生成説」と「人間尺度説」とを強引に結びつけるために「感覚論」が修正され変容していく過程も示されているので、テキストを参照されたい。

第一の論点について最も根本的な質問は、神崎繁先生からいただいた「(「人間尺度説」「運動生成説」「第一定義」三者は) 同じ点に帰着する(165d6)」の読みである。この点はいへん重要で発表原稿だけでは不十分と思い、当日第一部前半部のテキストと補稿とを配布し、説明させていただいた。この箇所は、従来ここだけ解説しようとしたために意味が不明瞭になったが、本稿では第一部全体から解説するという戦略をとる。三者の関係について明示的な記述は、4箇所ある。まず「第一定義」と「人間尺度説」が「同じこと(τὰ αὐτὰ ταῦτα)」を言っているという箇所(152a1-2)。次に「人間尺度説」と「運動生成説」

とを結び付ける「秘密の教説」(152c8-e10)、そして本文に引用した「われわれの論じてきた議論の結論」を示す箇所(160b5-c2)、そして今問題になっている「三者は同じ点に帰着する」という箇所である。最後を除いたすべての箇所では、三者は『『それ自体一である』否定説』によってのみ結び付けられていることは本稿で論じたとおりである。それゆえ第一部全体の議論構成からすると、最後の箇所も当然『『それ自体一である』否定説』を媒介とする三者の関係に言及しているといえるが、直接的には、その直前にある「われわれの論じてきた議論の結論」を示す箇所(160b5-c2)を受けていると考えるのが妥当である。

さらにバーニエットのB解釈を退けるためには、本発表が扱った第一部前半のテキストのみでなく、さらに第一部後半のテキストにより補強することができる。以下、当日配布した補稿を引用しその点補足したい。

第一部前半で、プラトンは「ある」という「ことば」の成立を解明するために、まず、「ある」を相対的な意味で用いる「人間尺度説」と、感覚の流動性を根拠に「ある」の使用を否定する「運動生成説」を導入する。「第一定義」は「人間尺度説」から導出され、「人間尺度説」と「運動生成説」は、パルメニデスに対峙して「それ自体一である」ものを認めないという立場に立つことが確認される。プラトンは、「それ自体一である」という「ことば」の使用を否定する相対主義や生成流転の思想を根拠に、「感覚が知識である」と主張する立場をプラトンは第一部前半で取り上げる。そして第一部後半でそのような立場を検討して退けるのである。

それゆえ第一部後半は、「人間尺度説」「運動生成説」両説を根拠に「第一定義」が正当化できないことを示す議論がその大半を占める。プラトンが両説そのものを反駁する方法をとらないことは注意すべきである。プラトンは直接的な感覚経験が感覚者に対して相対的に生じることや、万物が生成流転の中にあることを否定しているわけではない。彼が問題にするのは「ことば」の問題である。プロタゴラスが「ある」は相対化されている、と語るその「ことば」、あるいは、絶えざる運動生成するもののあり方を記述する「ことば」が、両説の主張する「それ自体一である」という「ことば」の使用禁止と矛盾することをプラトンは明らかにする。

本稿で指摘したとおり、プロタゴラスは、相対主義が本来認めてはならない鳥瞰的に世界をみる超越的な視点に立って弟子達に「秘密の教説」を説く。この矛盾は第一部後半のプロタゴラスの自己反駁においてさらに明白になる。プラトンは巧妙に「誰かにとって」という限定句を付与しさえすれば相対主義は貫徹できると思込んでいる相対主義者との問答の場面を拓き、「誰かにとって」という仕方で相対化する装置そのものが自己矛盾をかかえ、限定抜きの真偽の判断に関与してしまうことを明らかにする。プロタゴラスは、本来語ることができない他者(「人間尺度説」反対者)の思いの真偽について言及しなければ、プロタゴラスは『『人間尺度説』は真である』と、われわれに相対主義を説くことができない。この議論は、プロタゴラスが相対化された「ある」のみを認める限り、真理をプロタゴラスが整合的に説明する「ことば」を持たないことを示している。真理を語る整合的な

「ことば」を持たないなら、知識を語ることはできない。つまり、「『それ自体一である』否定説」に立って「人間尺度説」を根拠に知識論を構成することはできないのである。

「運動生成説」反駁においてプラトンは、感覚することと感覚対象を「ことば」で記述することとのずれを示し、「運動生成説」が「ことば」の成立を危ぶむことを示唆している。つまり、「何ものもそれ自体一であることがない」という立場に立つと、対象が1つの規定に留まることを一切認めないゆえに、われわれが世界について記述する可能性が奪われ、「ことば」も知識も否定することになってしまう。プラトンはここで、世界が事実として運動生成していないということを証明しているのではない。運動生成するものを「何かで『ある』」と記述することを基礎付けることが、「運動生成説」が内部ではできないことを示しているのである。

以上の議論から、「『それ自体一である』否定説」に立って「人間尺度説」と「運動生成説」は知識論を構築することはできない。それゆえ、「知識は感覚である」という知識の第一定義と両説は同一とはいえず、大きな隔たりがある。また、「人間尺度説」「運動生成説」それぞれから「第一定義」を導出できるかどうかを検討する議論構成は、帰謬法とはいえず、「運動生成説」反駁は「人間尺度説」および「第一定義」の真理値に影響を与えない。したがって、第一部後半部の議論構成は、バーニエットのB解釈と齟齬がある。

\*

討論の際に問題になった第二の論点については、プラトンの思想史における『テアイテトス』の位置付け、特にこの解釈と中期イデア論との関係および『ソフィステス』との関係に質問が集中した。その中で納富信留氏の指摘は示唆に富んでいた。納富氏によれば、本稿で提起した『テアイテトス』第一部の図式を『ソフィステス』の物質論者と形相論者との対比とを関連させて、両対話編をパルメニデスの思想との対比という観点からつなげて解釈すると、『パルメニデス』でプラトンが指摘した問題が後期対話編でそのように継承したかを図式的に理解できる。『ソフィステス』以降エレアの客人が対話相手になっている点からも、プラトンがパルメニデスを意識して中期イデア論を批判的に検討していることがみてとれるが、『テアイテトス』も同じ問題意識を共有している。

そのように考えると、『テアイテトス』での思索が、『ソフィステス』で提示された分割論や命題の真偽の定義とどのように関係するのかが問われることになる。この点についても質問をいただいたが、『テアイテトス』全体をどのように解するかとかかわり、第一部前半だけでは語り尽くせず、十分に答えることができなかった。そもそも、プラトンの思想史上の解釈は、論者の力を超えているが、以下、わずかな見通しだけでも示したい。

第一部全体の議論構成からすれば、「人間尺度説」と「運動生成説」とを根拠に、「感覚は知識である」という「第一定義」を正当化することはできない。残された問題は、感覚対象について語るわれわれの「ことば」がいかんにして成立し、知識はどのような仕方で語れるか、である。第一部最後の反駁で、プラトンは事物の絶えざる運動変化を感覚器官との相関関係によって感覚することと、感覚対象について魂が感覚器官から独立に思考するこ

とを区別する。そして、色や音、硬さや柔らかさが「ある」ことや、相互に異なる性質であること、各々の性質の同一性や差異性については魂が思考する事柄だと説明する。すなわち、思考上措定されている対象（「色」「音」「硬さ」「柔らかさ」「善」「美」）の相互関係を確認する同一性判断および、そのような判断の前提となる存在措定に際して「ある」が用いられているのである。

このような「ある」は感覚の現場で、今感覚している対象の感覚性質を記述する際に用いられる、「ある」ではない。論者は、述定が主題的に取り上げられるのは『ソフィステス』においてだと考えている。『テアイテトス』では、例えば、今感覚している対象の色を記述しようと思っている人が、「音ではなく色を記述しよう。」という意図を持つ際に必要となる「色」と「音」に関する了解事項である。プラトンは、「運動生成説」反駁で問題になった性質の同一性が確保されるのは、感覚においてではなく、魂による思考においてだという。

「運動生成説」反駁が示すとおり、「白」が「白」であること、その同一性はわれわれが特定の対象について「白い」と述定するためにも不可欠である。個別的対象の性質を捉える「ことば」が成立してはじめて、それを記述する述定文の真偽を問題にすることができる。したがって知識は、感覚器官との相関関係のなかで時々刻々変化する「感覚」にではなく、魂が感覚器官から独立に「あること」について考察する「思考」にある。このことを確認することによって、第一定義は反駁され、第一部は終了する。

第一部後半でプラトンは、プロタゴラスの相対主義を反駁する立場をとり、各人が「思いなし」において判断の際に用いる「ある」を相対的な「ある」と読み替える立場を痛烈に批判した。そして第二部以降、各人がそれぞれに閉じた相対的な世界で、自分にしか理解できない言語（相対的な「ある」）を用いているのではなく、各人の「思いなし」において用いている言語が相互に了解可能な言語（限定抜き「ある」）として使用されていることを第二部以降の議論で示そうとする。第二部以降『ソフィスト』に至るプラトンの思考の路線は、各人の「思いなし」の中にいかに公共性を確保するかであった。それは公共的な言語の使用を足がかりとして、「私だけの思い」から「われわれの思い」へと拓ける道であり、各人が自分の「思いなし」を基盤に相互にコンセンサスをとる方法であった、と論者は考える。

『テアイテトス』第三部で、「真なる思いなし」に「当の対象を別の対象から区別する差別性の記述」を加えても、「思いなし」が「知識」に昇格することはない、ということが明らかになる。そして続く『ソフィスト』では、初期から『テアイテトス』までソクラテスが求めてきた、「一つの簡潔な定義」、すなわち、当の対象を別の対象から区別する差別性の記述の探求は姿を消す。そして分割法による新たな定義が、幾通りも登場することになる。『ソフィステス』の冒頭でエレアの客人は次のように言う。「今、ソフィストについて私と君が共に持っているのは、名だけであって、その名で名指している当の事柄については、おそらくめいめいが個人的に自分たちで了解しているのである。しかし、常にあらゆることについて、ロゴスを離れて、名前についてのみ同意するべきではなく、ロゴスを

通して、事柄そのものについて同意しなければならない (218c1-5)。」

ここでプラトンは、「思いなし」において「めいめいが個人的に自分たちで了解」している事実から出発している。そして分割法による定義は、各人が「思いなし」において捉えられている対象の分別を「ロゴス」により明らかという仕方で、定義が行われる。これは、初期同様、各人が「思いなし」において、それぞれ自分たちで了解しているものを共同で吟味検討し、名前の一致のみではなく、ロゴスを通して明らかにしていこうとする営みである。ただそのロゴスは、初期のような、対話相手が知っているはずの「一つの簡潔な定義」ではない。それに代わり、「動」「静」等概念の同一性や差異性相互関係を対話相手と確認する作業へと移行する。すなわち、各人が「思いなし」においてどのような仕方で対象を分別しているかを確認し、そこで相互に一致している対象の区別をことばにしたのが「ロゴス」なのである。それは『テアイテトス』第二部での思いなしにおける「色」「音」「硬さ」と「柔らかさ」「正」「不正」との差異性や反対性を相互に確認する営みと質を同じくする。そして「色」「音」等々を「あるもの」と認めることは、第一部での「何もそれ自体一であるものはない」という立場に対する入念な批判に裏打ちされている。